

## 第3章 村勢の安定、北海道庁時代

### 第1節 幌別郡の発展

#### 登別温泉

登別温泉は、年間約400万人が訪れる日本有数の温泉地であり（登別市「平成30年度 月別・前年対比観光客入込調査表」）、登別市の大切な観光資源である。

蝦夷地警衛に当たっていた南部藩が、オシヤマンベからユウラップ、エトモ領及び幌別領を支配することになった万延元（1860）年に引き継いだ書類の中に「一、ノホリベツ山中江温泉有之候間、去ル午年新道切開止宿所取建、旅人并土人共勝手次第湯治為致候」（03657「蝦夷地関係書上」）もりおか歴史文化館）との記載があることから、安政5（1858）年に温泉までの道が切り開かれ、宿が建てられたことが分かる。

開発したのは、幌別場所請負人の岡田半兵衛（恵比須屋）で、当時不漁等の影響で莫大な損失を受けたため、事業の立て直しを図るべく、元々あった小道を改修するなどして温泉の経営に乗り出したものと思われる。

登別温泉の恩恵は豊富な湯だけではなかった。硫黄の採掘である。近世後期、松前藩下で行われていたようだが詳細は不明である。

しかし、幌別場所が南部藩支配下となっていた万延元年（1860）も、硫黄の製造が続けられていたことがわかる（03674「蝦夷地引請渡

諸留」もりおか歴史文化館）。明治2（1869）年に白石から片倉家の主従が来た際には「硫黄ハ南部家支配之折、大分堀出（ほりだ）した後だったという（片倉家文書131 本澤浩斎「胆振国幌別郡支配所出張万記録」仙台市博物館）。

登別温泉の開発に着手したのは岡田半兵衛（実際は現地の支配人が実施）だったが、登別に居住し、湯守として温泉地の改良につとめたのは滝本金蔵である。滝本金蔵は武蔵国児玉郡本庄（現埼玉県本庄市）の人で、安政5年に箱館奉行所役人新井小一郎の募集に応じて北海道に渡り、現山越郡長万部町に移住したが、数月の後に登別に転住し、明治維新後は幌別役所より湯守の許可を受け、登別本村に宿を開いて、浴客の増加とともに温泉経営にとどまらず、道路の開鑿等の土木工事にも力を尽くしたという（幌別村役場文書「大正八年 庶務」登別市郷土資料館）。

滝本は、明治14年に私費で登別温泉までの道路を開削し、さらに明治21年には旅館を改築して2階建ての本格的な建物にして温泉経営に本腰を入れるようになった。明治23年には、室蘭線工事の関係者が温泉を利用するようになり、これらの客の便を図るため、翌年には、登別から登別温泉まで6人乗りの円太郎馬車が片道2時間で運行されることになった。

大正2（1913）年に室蘭市で



馬車鉄道（大正時代 登別市郷土資料館）

海運等を広く行っていた栗林五朔が第一滝本館等を譲り受け、ここから登別温泉は著しい発展を遂げることになる。

大正4年4月、栗林は浴客誘致を目的として、登別停車場と登別温泉を結ぶ軌道を敷設するため、登別温泉軌道株式会社を設立した。同年8月に着工し、12月3日には馬車鉄道が開通した。はじめは御者が不慣れながらも1時間20分で温泉まで行くことができ、好評だったようだ。

しかし、大正5年9月の御者によるストライキや、それ以前に起きた引き馬が暴れたことによる脱線事故等の諸問題を解決するため、勾配や途中の水の補給の水源確保などを慎重に検討し、大正7年5月1日に軽便鉄道を開通させた。温泉まで続く長い勾配を走るためには、蒸気を高圧にする必要があったため、水の補給は中登別のカムイワッカで行われた。ところが、蒸気を出す過程で火勢をあげる際に、機関車の煙突から火の粉が出て、乗客の衣服に飛んだり、沿線で野火や山火事を起こしたりすることもあった。その後、大正5年から温泉市街に送電していた勝岡の滝発電所にタービン2基を増設、また補助として重油の火力発電所、そして14年にカルルス発電所を設置し、電車が開通した。

電車は常時2台運行し、所要時間も片道35分に短縮されたが、満員の電車が坂にかかるのと電力が急に消耗されて、温泉市街の電灯が暗くなることもあったという。電車の開通は画期的なものであり、軽便時代の大きな正13年の年間入込客が約6万2千400人に対し、15年には約12万1千100人と倍増した。

乗客の増加に対応するためには、発電能力を上げる必要があったが、過大な投資は温泉軌道株式会社の経営に関わるため、昭和8（1933）年8月、電車を廃止してバスの運行が開始された。登別駅と登別温泉間

の交通は、馬車鉄道の開通から18年間で目まぐるしく変わり、登別温泉の発展に大きな役割を果たした。

### カルルス温泉

カルルスは登別温泉の西北奥に位置し、風光明媚で静寂な温泉地である。アイヌ語で「ベンケネセ（川の床）」と呼ばれていたこの地は、湧き出る温泉の泉質が、チエコ共和国の有名な温泉地であったカルロヴィ・ヴァリ（ドイツ語名でカールス・バード）と似ていたことから、カルルスと呼ばれるようになる。

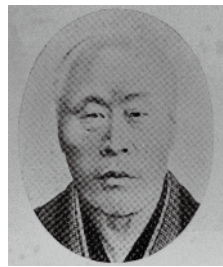
カルルス温泉は、明治19（1886）年9月、屯田兵配置予定地の実地踏査をしていた日野愛憲（日野久橘きゅうかつ養父）によつて発見された。その後、明治22年、木材業を営んでいた日野久橘（当時幌別在住）が、伐採樹種調査のためにこの地を訪れ、彼もまた偶然に温泉が湧出するのを発見したとされる。

この時、久橘は付近の岩陰で一夜を過ごし、湧出した湯水を飲んだところ、以前から悩んでいた「溜飲」が治ったという。同年、温泉地の開発を北海道庁へ出願したが、この時は許可されなかった。

その後、明治31年に、石川県出身で室蘭輪西村に居住していた薬種商の市田重太郎が当地の開発を申請し許可を受ける。市田は、資金の都合上、また久橘が先に申請していた経緯を聞いたことから協力をもちかけ、11月末には共同事業の契約を取り交わしている。久橘は、多額の資金を負担し、温泉場の開発、また幌別や登別温泉までの道路の開削を行った。

2人の努力が実を結び、明治32年8月6日、旅館1棟5部屋と、別に浴場を建て、多くの来賓を招き「カルルス温泉開場記念」式典を幌別（現中央町）とカルルスで行うに至った。

久橋は、大正5（1916）年に市田から全ての所有権を買い取り、他の開発者とともにカルルス温泉の整備に努め、現在のカルルス温泉の礎を築いた。カルルス温泉では、久橋を「開祖」とし、昭和3（1928）年には「功績碑」を建立している。



滝本金蔵  
（『市史ふるさと登別』より転載）



功績碑の前に立つ久橋と妻・六（登別市郷土資料館）

### 幌別鉦山の開業

幌別駅から旧富士鉄社宅街（現富士町）、川上公園を抜け山林を進むと、登別市ネイチャーセンターがある。ここは廃校となった幌別鉦山小中学校の旧校舎を利用した自然体験施設であるが、現在、付近に住宅はほとんどなく、過去に学校があったことも信じがたい様相である。

幌別鉦山の開発が本格的に進められたのは明治39（1906）年のことであるが、同41年にまとめられた「明治四十年村内概況調」（幌別村役場文書「明治四十一年庶務関係」登別市郷土資料館）では、「数年前ヨリ年々歳々他郡ニ転住スルモノ」が多く減少傾向にあった幌別の人口が、幌別鉦山事業の創始による「近年稀レニ見ル処ノ来住者」と農業目

的の移住者による急激な増加を報告している。同史料によると鉦山のあの幌別村では、登別・鶯別両村に比べ、前年から193戸の増加となっており、中でも鉦山地域は181戸、671人を有する最多の人口を抱えた地域となっている。

幌別鉦山の本格的始動については先に触れたが、その概要を北海道庁発行『殖民公報』41号（明治41年3月）で確認すると次のとおりである。幌別鉦山の鉦区は、海拔百餘り、採鉦面積77万7千336坪で、他に試掘鉦区が6か所あった。その沿革は古く、明治6（1873）年9月8日に幌別郡副戸長本澤直養が終日ここに出張し調査を行っている。数年を経て、鉄道敷設の請負で入地した仙台の早川組が、同25年から翌年まで銅鉦を試掘している。さらに、明治20年代後半から30年代後半にかけて小樽や函館からの来山者が鉦区内でいくつかの試掘を行ったが良好な結果は得られなかった。

ところが、明治39年夏に、各地で鉦山開発に乗り出していた三井物産合名会社の北海道支店長小田良治が鉦区内を採鉦し、鉦物は発見されたが各坑内で採算は見込まれなかったものの旭鉦において金が含まれていることを確認し、集中的に採鉦することとなった。

金銀銅を採鉦したが、次第に黄銅鉦を製錬した銅の生成が主力となっていた。旭鉦から幌別停車場（幌別駅）まで軌道が敷設され、馬にトロッコを引かせて運搬させた。

その後、事業は巨大化し、壮瞥の硫黄山から硫黄鉦を運搬するのに山越えするための1千609本の鉄索を張り、鉦石を入れたバケツを、電気動力を使って運搬し、幌別駅までは軽便鉄道で運搬された。

昭和9（1934）年に発行された『北海道鉦業誌』によれば、大正

5（1916）年には「既に本邦第一位の硫黄産出鉱山」となっている。大正9年には北海道硫黄株式会社（以下「北硫」）が設立され、一層盛況の装いを見せた。このように、生産性が向上するなか、風下の農業地帯からの煙毒公害や、サケが遡上する幌別川での鉱毒問題なども表面化した。

昭和30（1955）年代になると、硫黄業界に不振の影が見え始め、昭和40年頃には鉱床が尽き、北硫は同46年に硫黄の製錬を中止、昭和48年ついに同社幌別事業所が閉鎖となった。

最後に、この鉱山での勤務、そして暮らしの様子を後世に残した人物を2人紹介しておきたい。

1人は、長野県信濃国小県郡依田村出身の農家の次男・金井抱二である。

金井は明治24（1891）年生まれ、同39年3月に高等小学校を卒業した後、4月からは実家において家業に従事していたが、同年12月から青年夜学会へ入学して、多少漢文を学んだという。

ただ、家庭の経済的事情もあり、明治40年3月、現上田市松尾町の資産家大井栄作の弟・覚治（当時三井物産株式会社札幌副支店長）に相談し、北海道で働くことが決まった。北海道に渡って、札幌の大井覚治宅を訪ね、同年4月1日に当時三井物産札幌支店長であった小田良治が私営する幌別鉱山の分析所給仕となった。同年9月まで分析所に勤め、10月からは鉱山事務所の倉庫部に異動、明治41年2月に鉱山の設備が完成し、各種事業も差支えなく行われていた頃、大規模な人員整理が行われたが、金井抱二はそのまま留まり、4月から販売所書記に命じられたという。最終的には、鉱山の所長代理にのぼりつめ、小田良治が創業した

五番館（札幌市）に勤めた。

この金井が、明治40年から大正10（1921）年まで綴った日記が残されており、今後詳細な解読が進められれば、幌別鉱山の内情はもちろん、金井が見た当時の市内の様子も見えてくるだろう。

もう1人は、平成6（1994）年に『史観』をまとめた長内弘である。彼は、鉱山で育ち、勤務した。この『史観』は、多くは金井抱二の日記や、市史等の記述に依っているとされていると思われるが、彼が幼いころから見聞きしたことや鉱毒問題、鉱山勤務の中で体験した労働運動については貴重な証言記録である。



金井抱二（後列中央） 登別市郷土資料館



金井抱二日記（登別市郷土資料館）

参考文献

- ・小笠原栄治編輯『北海道鉱業誌』昭和9年
- ・北海道鉱業会編『北海道の金属鉱業』昭和29年
- ・北海道商工部資源課編集『北海道の鉱業』北海道鉱業振興特別調査報告書：『昭和35年
- ・記念誌発行編集委員会『登別労働運動のあゆみ』昭和59年
- ・登別市史編さん委員会『市史ふるさと登別 上巻』昭和60年
- ・長内弘『史観』平成6年

## 第2節 大正から昭和へ

### 二級町村幌別村

明治末期から大正初めにかけて、村の財政規模が1.5倍に膨れ上がるほどの発展を見せた幌別郡3か村は、大正8（1919）年4月1日、幌別郡内の幌別・登別・鷲別の3か村を1つにまとめ、新たに二級町村の「幌別村」が誕生した。「二級町村」制とは、町村長、書記及び収入役は北海道庁長官や支庁長が任命し、彼らの給料などは北海道地方費から支給され、住民の選挙により選ばれた議員で構成される町村会が置かれたが、自治権が制限されて、保護監督的規制を受けるものであった。

二級町村制施行と同じ年の大正8年5月1日、初の村会議員選挙（定員12名）が行われた。そして、同年5月11日に記念すべき第1回幌別村会が開会した。初めて議決された議案は「幌別村会会議規則について」で、今後の村会での会議の方法を定める重要なものであった。



開村50年村制施行記念祝賀式典（登別市郷土資料館）



記念祝賀会余興の騎馬競争（登別市郷土資料館）

こうして発足した幌別村は、明治2（1869）年の旧仙台藩士片倉家主従の移住から50年目を迎えた。大正8（1919）年9月12・13日に、この片倉家移住を起点にした「開村五十年」と、町村制施行を記念して、各種の行事が開催された。9月14日付けの『北海タイムス』紙記事に掲載された概要は次のとおりである。

12日は幌別村の忠魂祭が執行され、午後7時から小学校（現幌別小学校）生徒の提灯行列があつた。市街地を過ぎ、戻ってきた際には村長の発声にて幌別村万歳を三唱して散会となつた。13日には、早朝に騎馬競争とマラソン、午前9時半に幌別神社（刈田神社）で開村50年報告祭、午前11時には新築の議事堂では開村50年記念村制施行祝賀会が開催された。村長の式辞後、功労者である男爵片倉景光（故人）ほか42名に対し、表彰が授与され、男爵片倉健吉代理齋藤良三、宮武・加地村会

議員ら来賓による祝辞や表彰者総代の答辞後に閉会となった。午後より、旗行列相撲やアイヌ民族による熊祭り、踊り、演劇等の余興が行われるなど、盛大に執り行われた。

### 第1回国勢調査

大正9（1929）年、第1回国勢調査が実施され、各種の統計がまとめられた。国勢調査は、「社会の実況」を知るために、国内に住んでいるすべての人を対象に人口や世帯の実態など、「全国的情勢」を明らかにする国の最も基本的な統計調査である。

明治29（1896）年に万国統計協会から「1900年世界国勢調査」への参加を勧誘されたことを契機に、国も明治35年に「国勢調査ニ関スル法律」を制定し、明治38年に第1回国勢調査が行われることになったが、日露戦争の勃発や第1次世界大戦への参戦と相次ぐ戦争の影響で延期され、なかなか実現しなかった。

大正7（1918）年の帝国議会で、大正9年に第1回国勢調査を行うことがようやく確定し、「臨時国勢調査局」を設置するなど、実施に向けた体制が整えられた。各地で調査の趣旨と重要性をより広く伝えるため、宣伝ポスターや絵葉書が作られ、幌別村ではこのほかにも記念の鉄瓶が製作された。国勢調査員は、内閣から任命される臨時国家公務員で、職務上知りえたことは、調査後も秘密を守る義務が課され、本村では村職員、村会議員、教員、青年団役員などから28名が選ばれ調査が行われた。結果、大正9年10月1日現在の世帯数1千447世帯、人口7千1人（男3千653人、女3千348人）と確定した。



第1回国税調査記念鉄瓶（登別市郷土資料館）



第1回国勢調査会記念撮影（登別市郷土資料館）

### 役場移転問題

昭和2（1937）年2月22日、登別地域の人々が村民大会を開き、登別村内に役場を移転することを決議した。移転希望の理由は、「産業の中心が登別村に移っていること」、「登別温泉の入口としての重要性」、「人口分布や納税比率の占める割合の高さ」が上げられた。

昭和元年末の人口は幌別村が1千816人、これに対し登別村は3千225人であった。また、納税額も、幌別・鷺別をあわせて1万645円余に対し、登別村は1万9千275円余と大きな差があった。さらに、注目される移転論の根拠に村政の粛清があったとされる。大正末期に村の収入役による公金費消問題、また盗難事件も発生し、多額の税金が浪費されていた。

村会による調査や検討の結果、移転費用に多額の経費を要することが判明した。また、登別温泉を国立公園に指定するために全村一致の運動、登別村と白老郡の境界にあたる伏古別川の河口付近に船入澗を築設するためにも、登別派は幌別派の協力が必要であった。役場移転問題は、このような状況の中で冷めていき、昭和4年2月に調査委員会から村会に報告書が提出され、事実上の棚上げとなり、移転は実現しなかった。

**実現しなかった** 大正期に入り、栗林合名会社による登別温泉の開  
**国立公園** 発への資本投入によって交通の整備が行われた。

また、同じ頃、登別温泉とカルルス温泉の里道開削による登別温泉軌道への連絡なども行われて、温泉一帯の整備が進められ、それに伴って利用客数も増加していった。

大正4（1915）年10月、温泉場を中心とした総合遊覧地とするために「公園設置ニ関スル出願」が道庁長官に提出された。

この段階では、具体案や資金調達もたつていなかったため、保安林払下げは容易に許可されなかった。その反省を基に、その後、具体的な計画、公園設置プランが論じられ、財源も地元財力で実現する方針で、村役場は道庁と室蘭支庁に要請し続けた。大正10年には、地元で「登別公園期成同盟会」を組織した。

大正8年に「史蹟名勝天然記念物保存法」が成立すると、室蘭支庁から指定申請の調書を出すよう連絡があり、役場ではその調査を、登別温泉軌道（株）に依頼し、「登別温泉」の名勝指定を申請した。

公園化の調査とも関連して、温泉周辺の森林を調査した北海道帝国大学の新島博士は、この地を「北海道中帯南部の植物区系を代表する森林

である」と意見具申したことから、「名勝」ではなく、「天然記念物」として指定すべきとの方向になった。

このような中、北海道は大正10年9月、条件付きで国有保安林を幌別村に貸し付けることを認めたものの、天然記念物指定の具体化、農商務省の森林公園案など情勢が当初と大きく変わったこともあり、村役場は保安林の貸し付けを受けようとはしなかった。

地元計画による登別温泉公園設置計画は、大正12年12月28日をもって打ち切りとなり、13年12月9日には登別原始林が「天然記念物」に指定された。

こうした情勢を踏まえ、国立公園構想が持ち上がった。昭和2（1927）年、「国立公園期成同盟会」（会長・幌別村長）が結成され、地元でも「登別温泉保勝会」が設立されて官民一体の運動が始まった。しかしながら、内務省の調査報告では、支笏湖、洞爺湖と容易に繋がる事が前提である内容の見解が示され、今日のような道路が整備されていない当時として、国立公園指定の可能性が否定されたものであった。昭和9（1934）年の第1回指定では、道内で「阿寒」と「大雪山」が指定され、幌別村の努力は実らなかった。その後、国立公園の指定がなされるのは、昭和24年5月の登別温泉を含めた支笏洞爺国立公園まで待たなければならない。

#### 開村記念日の制定

昭和8（1933）年1月31日、第1回幌別村会に諮問案第1号として、「自治精神涵養ノ目的ヲ以テ本村ノ建村祭日ヲ設定セントス」との提案がなされ、これに對して「毎年9月4日を建村祭日とする」との答申が議決された。



昭和17年開村記念日

記念日とされた「9

月4日」は、明治14

(1881)年に明治天

皇が北海道内を巡幸した

際に幌別村内を通過した

日で、その準備は村内あ

げて道路改修や休憩所の

整備がなされ、村にとつ

て一大事業であった。時

代は、満州事変の勃発(昭

和6年)、日本による満州国の建国宣言がなされ(昭和7年)、国内では「大

日本国防婦人会」が創立される(同年)など、戦争に向かって少しずつ

舵が切られ始めた時であった。そして、当時、「大日本帝国憲法」にお

ける大元帥たる明治天皇の来村がたいへん大きな意味を持っていたから

なのかもしれない。

しかし、昭和12年の日中戦争の開始後、昭和17年の開村記念日に関す

る文書に綴られた、式辞において、明治天皇の巡幸よりも旧仙台藩片倉

家主従の幌別郡移住への記載が多いことから、当時は、武士団の移住が

村の発展の始まりとして認識され、祝祭の対象であったことがわかる。

開村記念日も、昭和19年には、戦雲の逼迫により式典は行われなかつ

た。

#### 参考文献

・登別町『登別町史』昭和42年

・登別市『市史ふるさと登別』昭和60年

・登別市『登別市議会史』昭和50年

### 第3節 アジア・太平洋戦争とその影響

#### 戦争へ

明治期の日本は、強大な欧米列強に対抗するため「富国強兵」「殖産興業」といったスローガンのもと、急

速に近代化を推し進めた。他の列強と同じく、武力による資源や領土獲

得のための対外膨張政策(帝国主義)がとられ、明治27(1894)年

の日清戦争勝利後は、その賠償金をもって軍備を拡張し、日露戦争(明

治37~38年)、韓国併合(植民地化、明治43年)、大正時代には第1次世

界大戦への参戦(大正3~7年)と、戦争を重ねた。昭和12(1937)

年の日中戦争までに、本市では判明分で24名が戦死している。

日本が近代化するなかで、「大日本帝国憲法」が明治22(1889)

年に発布され、天皇が統治権の全てを握る総攬者となり、陸海軍の統帥

権を有することになった。

翌23年、この精神的支柱として教育勅語が発布されると、各地の学校

に設置された「奉安殿(奉置所)」と呼ばれる建物に御真影(天皇、皇

后や皇族の写真)とともに納められ、子どもたちにとつても神格化され

た天皇と我々「臣民」、という考え方が一般的なものとなっていた。

明治以降の日本においては、明治6年に交付され、同22年に全面改正

された「徴兵令」により、国民皆兵、義務兵役制度が行われ、満17歳か

ら40歳までの男子は兵として登録され、満20歳になると「徴兵検査」が



義務づけられていた。

昭和2（1927）年12月1日には、従来の「懲兵令」を全面改正した「兵役法」が施行され、国民全ての男子に兵役が課されることになった。昭和6年の柳条湖事件に端を発する満州事変、昭和12年の盧溝橋事件に端を発する日中戦争、そしてハワイ真珠湾攻撃を発端とする太平洋戦争が始まり、本市でも多くの男子が召集されていた。これらの戦闘の多くは、中国をはじめとするアジア諸国や太平洋地域の島々で行われ、多くの死傷者を出した。

一方、昭和12年、当時の内閣によって節約・貯蓄など、国民の戦争協力をうながすため「国民精神総動員運動」が展開され、翌13年には「国家総動員法」が制定され、戦争または事変に際して、国家が人的・物的資源の動員を行うことを可能にし、国民生活も戦争遂行のため全面的な統制下におかれることになった。また、昭和14年には「国民徴用令」によつて、一般国民も軍需産業に動員されるようになった。

戦争末期、広島市及び長崎市への原爆の投下によつて更なる被害者を生み、日本全体で260〜320万と言われる死者を出したアジア・太平洋戦争は、昭和20年8月14日に日本が無条件降伏し、翌15日終戦を迎えた。この間、本市出身の兵士約260人が命を落としている。

### 地域から戦争へ

日中戦争とそれに続くアジア・太平洋戦争では、それまでの戦争と比べ、より多くの兵士が戦場へ送られた。兵士の多くは、民間人だった。

徴兵検査では、身長・体重・病気の有無など詳細な検査をもとに、甲・乙・丙・丁・戊に選別され、現役や補充兵など要員の割り当てが行われ

た。昭和18（1943）年には、激化する戦局の中で兵士増員を図るため、徴兵適齢が満19歳以上に下げられ、また、大学生等の徴兵検査の猶予期間が廃止されるなど、多くの学生が兵士として戦場に送られた（学徒出陣）。翌年には、さらに徴兵適齢が2歳下げられ、満17歳以上となり、終戦直前の昭和20年6月には「義勇兵役法」が公布され、15歳から60歳までの男子、17歳から40歳までの女子に兵役が課されることになった。本市においても、多くの方が兵士として戦場に送られている。戦争にかかる兵事関係の庶務は各地の役場で行われたが、当時の行政文書がほとんど残されていないため、本市の出征者の数は残念ながら把握することはできない。兵事関係文書は、終戦直後に廃棄指示があつたとされ、本市においても、その多くは廃棄されたと推測される。



【動員日誌 第三号】（登別市）

しかし、本市には『動員日誌』という公文書が1冊だけ残されていた。

これは、兵役にある国民を召集する際に、当時の幌別村役場（現登別市役所）の兵事係が、警察署からの動員の連絡をもとに対象者を在郷軍人名簿と照会し、交付した召集令状を誰が届けたのかを記録した日誌である。召集令状は、令状の色から「赤紙」と呼ばれた。在郷軍人とは、現役終了後の予備役、補充兵役など現役以外の兵役義務者である人々のことで、現役が終了した後も個々人の情報が調べられ、名簿によつて管理されていた。

『動員日誌』の表紙には第3

号とあることから、本来は少なくとも別に2冊あったことがわかる。残された日誌には、昭和18年2月7日から昭和20年8月12日までに動員された登別市民（当時は幌別村民）について記録され、約2年半の間に累計542人が地域から戦場へ兵士として送り出された。昭和18年以前の動員も確認できることから出征兵士の数はさらに多かつたことがわかる。

また、本市から出征し、戦死された方は『登別町史』によると284人とされている（日露戦争を含むが多くは日中戦争、アジア・太平洋戦争）。

### 地域の中の戦争

戦争は、実際に戦う兵士だけで行われたのではなく、「銃後」と呼ばれる戦場の後方にいる直接戦闘に加わらない一般国民、各地域の人々によつても支えられていた。「銃後」を守ることは、教育、出征兵士の支援、日々のくらしの中など国の政策などにより、国民に戦場の兵士との関係を強く意識させた。

地域の中で、子どもたちには、学校や家庭、書籍などによつて幼い頃から戦争に対する肯定的イメージが定着しており、大人たちは日々のくらしの中で戦場の兵士を支援する組織の結成や活動、青年たちを積極的に地域の防衛組織へ取り込むなど、地域全体で戦争に深く関係していたと言える。

本市においては、全国的に著名な温泉地である登別温泉を、古くは陸軍省が日露戦争の傷病兵のために第七師団（北海道）の転地療養所に指定、昭和14（1934）年には陸軍傷痍軍人登別療養所が開設され、昭和18年には湯本ホテルを買収して大湊海軍病院登別分院が開院するな

ど、他の地域とは異なる戦争とのつながりもあつた。また、温暖で積雪量の少ない適地として、昭和15年に胆振馬事訓練所が中登別に設置された。

### 銃後の人々

昭和3（1928）年から各地で始

まつた防空演習は、同12年の「防空法」により本格化した。それ以降、これに基づいて警防団・婦人会・隣組などが整備・統合され、銃後を守る組織によつて、戦争に向けての体制づくりがすすめられた。本市においても、愛国婦人会や国防婦人会の分会が組織された。昭和14年には防

護団と消防組を統合した「警防団」が組織され、村内各地に分団が置かれた。翌15年には部落会・町内会が整備され、その下に5〜10戸を単位とした「隣組」が設置された。同15年10月には「隣組」という歌がピクチャーから発売され「地震や雷 火事どろぼう 互いに役立つ 用心棒 助けられたり助けたり」と、その必要性が宣伝啓発された。

昭和17年、それまであつた愛国婦人会・大日本国防婦人会・大日本連合婦人会が統合され、「大日本婦人会」が結成された。これは、満20歳未満の未婚女性を除く女性を組織することを方針とし、高度国防体制に対応するため、「皇国伝統の婦徳にのっとり、自分の身を正しくし、家庭をととのえ、国に奉公すること」を掲げていた。会員は一時期、



登別温泉にあった陸軍傷痍軍人療養所  
（登別市青年会議所編 昭和51年）

図表1-3-1 室蘭地区防備状況要図（防衛庁防衛研修所戦史室 1971年加工）



2千万人を数えたという。

この他、本市でも翼賛運動の実践部隊とされた大日本翼賛壮年団、忠君愛国を目的とした青年団などが組織されたほか、昭和13年7月23日付けの『室蘭毎日新聞』によれば、幌別村銃後援会登別班が設立されており、様々な組織が銃後を支えた。

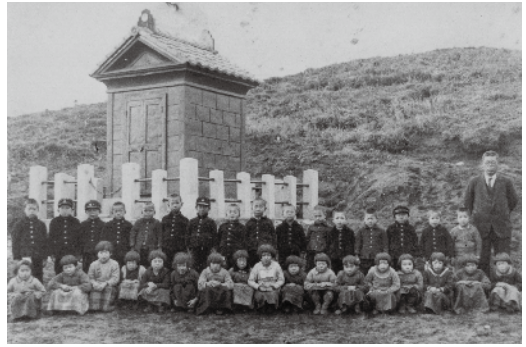
不足する労働力を補うため、昭和14年には「国民徴用令」が公布され、本市住民の徴用は、札幌市定山溪豊羽鉾山や壮瞥町久保内鉾山、赤平市豊里炭礦について『登別町史』に記録されている。朝鮮人については、昭和14年に「内地」（日本本土）動員が始まり、当初は政府・朝鮮総督府統制下の民間企業による「集団募集」の形式をとったが、昭和17年からは直接「官斡旋」による用達が行われ、さらに、同19年には、朝鮮人にも「国民徴用令」が適用され、本市においては、昭和20年に富浦に設置された特攻舟艇を格納する穴（防衛庁防衛研修所戦史室昭和46年、図表1-3-1）の作業員をしていたことが聞き取り調査で記録されているのみで詳細は不明である。

### 戦時下の学校

明治以来、人々が学んできた尋常小学校及び尋常高等小学校は、昭和16（1941）年4月1日から国民学校初等科（6年）及び高等科（2年）と改称し、これに伴って国定教



富浦海水浴場の奥に見える特攻艇格納穴と思われる崖面の穴（昭和40年）（登別市郷土資料館）



鷺別小学校にあった奉安殿（登別市郷土資料館）

科書も改訂された。

義務教育期間の8年間では、軍事下の皇国民の錬成を目的に、学校行事、儀式、礼法、団体訓練が行われ、体錬科では銃剣術などの武道が重視された。幌別国民学校（現幌別小学校）の初等科3年生の教員による戦争末期の学級経営方針を見ると「強靱な体力と剛健なる気力敢闘精神を練磨育成する」「映画新聞訓話等により敵愾心を昂揚する」ことなどが重視された。

視されており、授業は戦時国防訓練が大部分を占め、子どもたちは現在では当たり前の教育を受けることはできなかった（幌別小学校所蔵『昭和十六年度以降 学校経営』）。この国民学校は昭和22年（1947）4月、6・3・3・4制の小学校となるまで続いた。



『昭和十六年度以降 学校経営』（幌別小学校）

当時の幌別国民学校の教員がまとめた懐古集『采馬』（戦中幌小会昭和56年）によれば、戦争末期は戦局の激化で朝7時半から昼までの授業になり、食糧生産と家事手伝いが「少国民」と呼ばれた子ども

もたちの務めだったとされる。

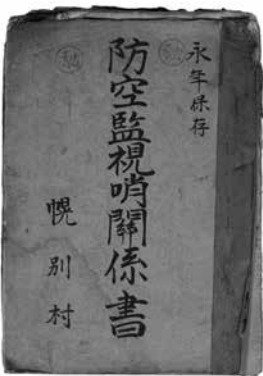
祭日の式典では、「御真影」が飾られ、礼装した校長によって「教育勅語」が読まれた。これらは、校舎外の奉安殿に安置され、子ども等の登下校時には、その前での最敬礼が義務付けられていた。

### 防空監視哨

昭和13（1938）年、各地に敵機を早期に確認するための防空監視哨が設置され、第7監視哨で

ある室蘭地区では長万部から苫小牧までに17か所設置された。本市内にも、同年に幌別村字本町148番地（現幌別町3丁目7番地）に設置された。監視は哨長1名、哨員12名が配置された（「哨」は見張りのこと）。

この監視哨は、幌別駅東口付近の個人所有の倉庫の上に屋上監視室として間口6尺、奥行き5尺5寸、高さ6尺5寸（1寸は約3・03センチメートル）で作られた。防空監視哨は、その後、刈田神社の境内に移設されたという。監視体制は24時間交代制で、地域の青年団や青年学校生らが要員として充てられ、青年学校の学生が監視業務に従事して授業に出席できない際は、監視業務が授業の一部として算入された。



『防空監視哨関係書』（登別市）

『防空監視哨関係書』には、哨長らの名前が記されている。また、『市史ふるさと登別』によると、哨長の下に副哨長がいて、昭和14年5月19日から同年9月5日まで1日も休むことなく続けられ、延べ120人の哨員が12組に分かれ、毎日7〜10人で交代勤務したとあ



刈田神社境内にあった防空監視哨  
(登別市郷土資料館)



片倉町にあった防空監視櫓  
(登別市郷土資料館)

る。  
民間人が防空哨戒を務めるので非常に緊張感のあるイメージがあるが、市の聞き取り調査の中では、幌別町に監視哨があった時には、当手に入りづらい黒砂糖のかたまりや酒などを飲食し、また隣にあった片岡商店からお菓子ももらえるために、5日に1回ほどのシフトをたいへん楽しみにしていたという。そのため、監視哨が刈田神社に移設されて

からはあまり人が行かなかったとも語られている。地方だったためか、軍事上の防空業務でありながらも、のどかな状況が伝わる話である。

### 登別空襲

本市内での直接的な被害は、昭和18(1943)年の潜水艦による艦砲射撃と昭和20年の戦闘機による襲撃がある。

潜水艦による艦砲射撃は、昭和18年5月9日午後11時40分、アメリカ軍の潜水艦ステイルヘッドによる砲撃があり、中登別にあった馬事訓練所と個人宅の畑が被弾したものの、幸いにして人的被害はなかった。

戦闘機による襲撃は、戦争末期の昭和20年7月14日朝、アメリカ軍空母から発艦したグラマン戦闘機11機が登別駅付近と登別小学校付近に機銃掃射をした後、幌別上空を旋回し、室蘭方向へ向かったものの3〜4機の編隊で引き返し、4発の爆弾を千歳町の炉材工場付近に投下した。また幌別駅前では、機関車や幌別鉱山の硫黄倉庫も襲撃され火災が起こった。翌15日は、蘭法華トンネルが爆撃され、線路が飴のように曲がって輸送に大きな影響を与えた。この空襲の本隊は室蘭への攻撃であり、翌日の艦砲射撃と合わせ、室蘭では死者436人以上という惨事であった。

聞き取り調査によると、市内のどの地区でも敵機を味方と間違えたらしく、幌別では馬小屋へ上って手を振ったそうだ。この襲撃による人的被害はなかったとされるが、防空壕に逃げるのが間に合わずグズベリー畑に逃げ込んだり、幌別駅近くの民家では、帰宅後部屋の壁に機銃の貫通痕があったようで、死者がなかったのは不幸中の幸いと言えるかもしれない。桑の実が黒くなりだした頃のことと経験者は鮮明に記憶している。



登別川沿いにあった防空壕

市内においても防空壕が盛んに作られたようであるが、現在も確認できる場所は非常に少ない。市民会館の裏（富士町）や登別川の上流、富浦町の蘭法華岬の崖、登別温泉町などに作られていたことが確認されているが、崩落の恐れがあるため入口は封鎖されている。

なお、『登別温泉国民学校沿革誌』には、昭和20年5月から同年8月までの間に空襲警報が8回発令されたことが記録されている。

題は進展することはなかった。

### 日鉄社宅の建設

昭和15（1940）年5月、日鉄輪西製鉄所の従業員住宅が字来馬（現 富士町）に建設されはじめた。建設地は、村有地約34畝であり、日鉄輪西製鉄所は買収のため幌別村と交渉し、同月の村議会において村有財産の売却が可決された。

昭和15年22戸、昭和17年752戸、昭和18年636戸の計1千410戸の社宅が建設されて社員の入居が開始された。これによって、社宅建設前の昭和16年の人口1万1千148人に対し、昭和19年には1万7千842人となり、大幅に人口が増えた。これまでの町の中心は鉄道から南側であったが、これを境に中心が鉄道の北側へと移っていくこととなる。

### 参考文献

- ・登別町 『登別町史』 昭和42年
- ・登別市 『市史ふるさと登別』 昭和60年

- ・戦中幌小会 『来馬』 昭和56年
- ・登別青年会議所（編）『写真で見える登別温泉史』 昭和51年
- ・防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦（2）』 昭和46年

### 分村問題

日中戦争が行われている昭和14（1939）年3月の第3回村会において、字登別温泉・字カルルス・字上登別の一部を登別温泉町として分村する議案が提出された。調査委員会が設置され、審議されたが、時期尚早の結論に至り決着した。

その1年前の昭和13年に、室蘭市が設立した都市計画協議会において、鶯別村（鶯別町・上鶯別・富岸の3字）を同市に編入する決定がなされた。これに対して幌別村は、室蘭市から正式に提議がなされるまでは静観することとしたが、昭和15年に鶯別村と幌別村の一部住民から編入反対の声が高まった。北海道庁が調整に入ることとなり、案をまとめていったものの、分村問題に関する幌別村内の意向が消極的な姿勢となり、また室蘭市においても幌別村の一部を編入することは困難と判断し、この問



長屋が広がる社宅街（昭和34年）（登別市郷土資料館）